

令和4年度入学 社会人選抜 試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	鯨岡 峻	<育てられる者>から<育てる者>へ	NHK出版, 2002年, pp.128-131より, 一部改変	NHK出版

社会福祉学部

小 論 文 (90分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

諸個人の集合が社会を構成しているとは言いながら、しかし一人の子ども、つまり社会化を身に被る者にとって、社会は既にある大きな存在、自分一人の力では如何とも動かし難い大きな力を及ぼしてくる巨大な存在です。その社会の一員になるためには、社会化が重要な意味をもってきます。

1 歳前後に、近所の同じ年格好の子どもとく育てる者>を交えての交流が始まると、子ども同士は主体のかかわり合いを経験するようになります。そこには一緒に何かをして楽しいという、これから周囲の人たちと一緒に生活してゆくことに向けての重要な経験も含まれていますが、しかしそこにはまた、それぞれの思いを持つ者同士がぶつかり合う場面も含まれてきます。子どもはそのようなぶつかり合いをく育てる者>に調整されるなかで、最も原初的かつ素朴な「社会化」を経験します。そして近所の友達同士のかかわり合いが深まり、僅かばかり社会化が進んだところで、幼児たちは保育園や幼稚園などに出かけて集団生活を経験するようになり、そこで集団の規範やルールを身につけるかたちで社会化への大きな一歩を踏み出します。そして学童期、青年期と、成長するにつれてさまざまな社会化を次々に身に被り、その結果ようやく社会性を身に纏った大人になって、社会の一員に組み込まれるようになるのです。

こうして、一人のく私>はく社会の一員>でもあるというように二重化されるわけですが、大人になっても社会化がなお進行するなかで、今度は後続する世代の子どもたちを社会化することに向かわねばなりません。く育てられる者>からく育てる者>への移行は、かつて社会化された者が後続の世代を社会化する者に移行することと重ならないわけにはゆきません。このように、あくまでも 1 個の主体となることを目指しながら、しかし同時に当該社会の一員になるべくく育てる者>から社会化され、いずれは社会の一員になって次世代を社会化するようになるというように、人はその生涯過程においてきわめて逆説的な振じれた生き方を余儀なくされます。これがく育てられる者>からく育てる者>への移行の一つの意味であることはすでに見てきたとおりです。

こうして社会化され、大人になった一個人としてのく私>は、誰とも交換不可能な唯一のく主体としての私>でありながら、しかしすでに社会の一員、くみんなのなかの私>でもあります。この二重性は、私がこのときはく主体としての私>、あのときはく社会の一員としての私>というように二重の顔を別々に使い分けるという意味では必ずしもありません。むしろ、この二重性が 1 人の私の内部で捻じれて立ち現れてくるのが問題なのです。私は他の人たちと一緒に考えたり行動したりすることが楽しかったり、喜びであったりすることがあります。このときの私は、あくまでく主体としての私>でありながら、同時にくみんなのなかの私>でもあり、「みんな一緒」の幸せを味わうことができます。それなのに、ときには他の人たちが「みんな一緒」になってく主体としての私>に圧力を及ぼし、私の存在を疎外するようなときもあります。あるいは、く主体としての私>がくみんなのなかの私>に吸収され、く主体としての私>を見失ってしまう場合もないわけではありません。このように、く主体としての私>とくみんなのなかの私>は、常にとはいわないまでも、私の内部でずれ、葛藤を引き起こす場合がままあります。

こういう疎外的な局面が現れてくるのは、<社会>や<みんな>の一員であろうとすることが、<主体である私>を押しつぶすような力を及ぼしてくるからではないでしょうか。言い換えれば、

<社会の一員>や <みんなのなかの私>になった分だけ、人はその多数性や同質性を隠れ義に、一人の人間に対して同質になるように圧力を加え得るということです。人を社会に巻き込み、社会の一員に仕立ててゆくことが、単に多数は善、少数は悪という力の論理を一人の人間に押しつける結果になるならば、そこでは<主体としての私>が圧殺されていくことは目に見えています。

社会化、文化化には、その肯定的な面の他に、いまみたような否定的かつ危険な面がつねに孕まれていることが、この二重性を生きることの難しさに繋がっているのでしょうか。実際、私たちは往々にして<主体としての私>の方を押し出し過ぎて<社会の一員>であることを忘れてたり、逆に<社会の一員>、<みんなのなかの私>のなかに埋没してしまつて<主体としての私>を見失ったり、それを盾にして他の<主体としての私>に圧力を及ぼしたりしがちなのも事実です。そこに、1個の主体であることを目指しつつ、社会の一員でもあるという、人間として生きることの難しい両義性を見とることができます。

(鯨岡峻『<育てられる者>から<育てる者>へ』, NHK 出版, 2002年, pp.128-131 より, 一部改変)

問1 本文の内容を450字以上500字以内で要約しなさい。

問2 下線部「社会化、文化化には、その肯定的な面の他に、いまみたような否定的かつ危険な面がつねに孕まれていることが、この二重性を生きることの難しさに繋がっている」に対するあなたの考えを、身近な事例を示したうえで、600字以上800字以内で述べなさい。